



モンゴルに行きませんか「海城学園モンゴル スタディツアー」

この夏、「海城学園モンゴル スタディツアー」の開催が決定しました。募集対象学年の中学3年生、高校1年生には説明会案内のプリントが配布されましたが、全学年の皆さんにもプログラムの概要をお知らせいたします。

- 目的
- ・提携校である新モンゴル学園との交流を深める
 - ・広大な草原の自然と文化を体感し、知見を広める
 - ・日本大使館やJICAの施設を訪れ、モンゴルが抱える課題を知り、その解決に向けての取り組みを学び、日本人が海外でできる行動について考える

日程 7月22日～7月29日

場所 モンゴル、ウランバートル及びその周辺

学年 中学3年生及び高校1年生

定員 最大12名

その他 本校教員3名が引率

説明会 5月6日(土)、13時30分、本校第一会議室

今回、対象学年を中学3年生と高校1年生にしましたが、応募者数が定員に満たない場合は、他学年からの参加も歓迎いたします。

なお、新モンゴル高校との関係を築いてきた数学科主任の川崎先生に、「海城学園モンゴルスタディツアー」の意義について寄稿してもらいました。是非お読みください。

大草原 満天の星 海城生

モンゴルへのスタディツアーの実施が決定されました。

モンゴルの魅力はその雄大な自然での活動はもちろんのこと、多岐にわたります。

一例として学術的な興味に絞っても、地政学的な興味、恐竜の化石発掘に代表される地学的な興味、ユニークな植生などの生物学的な興味、また日本語と同種のウラルアルタイ語族であることの興味、あるいは文学的興味(司馬遼太郎、開高健らの作品 etc)、そして我が国のように和算に源流を持ちつつ米英独の流儀を取り入れた数学教育とは異なり、仏露にその教育源流を持つ数学教育に関する興味等々が挙げられます。

ここでは、こういった理由以外で「なぜ研修地がモンゴルなのか？」を述べたく思います。

まず、本校の生徒が海外研修するにあたり、その実施の大きな目的のひとつとして

「臨機応変な対応をできるようにする」

ことを挙げたく思います。

その理由を次のように考えます。

本校の入試レベルは上昇の一途をたどっています。生半可な学習では入学することはできません。皆さん本当によく頑張って入学したものです。皆さんと親御さんに改めて深い敬意を表し



草原にそびえるチンギスハーンの像

ます。

多くの皆さんは、高度にシステムティックな受験路線の下、小学4年生位からでしょうか、懸命に努力してきたことでしょう。

一方、その時期は屋内屋外を問わず試行錯誤をする体験が必要であるとも言われています。本校がPAやDEを重視する所以です。

優秀な海城生ですが、時間的余裕がもたらす試行錯誤体験は必ずしも多くないと思われます。このことによるものでありましょう、少なくない生徒が、丁寧な指示の下での実務能力には卓越していますが、指示のない場合、置かれた状況から「おおよその最適解」を推測してそれに基づいて行動する能力を備えているか、と問われればさて如何でしょうか。

確かに時代は急速なICT化が進み、ますます行動のマニュアル化が進むことは事実でありましょう。

しかし、本校の建学の精神にある“国家・社会に有為な人材”たる者、マニュアルの存在しない状況においてこそ如何に動くか、が問われることは、時代に左右されるものではないと強調したいのです。

もちろん、短期の研修で即、臨機応変な対応ができるようになることはないでしょう。しかし、とりわけ先進国ではなく、開発途上の地での生活体験が、自身の上記の部分での至らなさを考える良い機会になることは確かだと思ふのです。

そしてまた、その地で得た経験や知己と君自身の努力が相まって、末にはそのような能力が身につくことが期待されます。

そこで、この目的が叶うであろう研修地としてモンゴル国を挙げたいのです。

無論、この目的に叶う他の開発途上国もあるかもしれません。

しかし、本校と新モンゴル学園との提携関係を利用しない手はないと思われます。

もとより、海外研修を行う以上、安全面の確保は必須でありましょう。紛争地帯などを避けるのは当然のことです。

現在、モンゴル国は全方位外交を展開しており、日米中露をはじめ多くの国々と極めて良好な関係があります。加えてご承知の通り、大変な親日国です。

確かに7～8年前は、都市部におけるインフラ面での不安や急速な資本主義化がもたらす貧富の差からくる犯罪(主にウランバートル繁華街でのスリ)が心配されましたし、マンホールチルドレンの存在を大きな社会問題として記憶されているむきもありましょう。これらは、現在大幅に改善されています。

以下ではわたくしの過去2度のモンゴル訪問と、海城・新モンゴル両校数学科の共同事業を通じた個人的な経験に即して述べたく思います。

元々、移動して牧畜を行うことを生活の基盤においてきたモンゴル人のメンタリティは「個」を大切にします。なるほど、極寒の地において、かつまた視界に隣家がないといった状況で暮らしてきた人々は、「人頼み」ではなく「自分もしくは家族で解決する」習慣がついています。

わたくしが新モンゴル学園で授業をした際、彼、彼女らは「まずは何とかして自分でできることはやってみよう」という態度が横溢していました。これは、このようなメンタリティによるものではないかと推察しています。

また、多くのモンゴルの人々に“見る前に飛んでみる”といったメンタリティを感じています。これも上記の生活形態と無縁ではなからうと思われれます。

思えば、山犬や狼その他の外敵がいつ迫り来かわからない状況にあってはそうせざるを得ないわけです。実に逞しい人々といえましょう。わたくしは、生徒との交流でそれを感じたのですが、それ以上に先生方との共同事業遂行の際に痛切に感じました。

「色々課題はあるだろうけれど、将来に資するものと思えばとにかくやってみようよ！」といった彼、彼女らのバイタリティは、我々の共同事業推進において大きな力となったのです(両

校数学科の共同事業は、今後のモンゴル国のカリキュラム策定に大きな寄与をしたようです。

現在、首都ウランバートルはモンゴル国の人口の約半数にあたる130万人が生活する大都市ですが、そうなったのはこの20年弱のことです(1980年代は70万弱でした)。根底にあるメンタリティは20年くらいで変わるとは思えませんし、草原においておや、でありましょう。

こう見てくると、モンゴルでのスタディツアーが、臨機応変な対応をできるようになる、否、できるようにせねばならないと感じる契機になることは必定に思われます。皆さんはどのように感じるでしょうか。

モンゴル人との交際において、君のもつ綿密さや慎重さの重要性が、新モンゴル学園の彼、彼女らに伝われば、私にとってそれは望外の喜びであり、まさに交流の最大の成果であろう互恵関係が築けるといえるものです。

最後に、本年は日本国とモンゴル国が外交関係を樹立して45周年目となります。在モンゴル国日本国大使館では、それを記念する多くの催しが行われています。

その記念すべき年に、是非みなさんと悠久の大地を訪れたいと思ってやみません。

大草原、見上げれば満天の星空の下、 自らの来し方行く末を考えるー

さあ、石塚先生、関口先生の両碩学そしてわたくしと一緒にモンゴルへ行きましょう！
かわさきますみ(本校グローバル教育部アジアアフリカ担当者)

日韓高校生交流キャンプ

この2年続けて海城生が選抜されている高校生対象のプログラムです。

プログラムの内容は、1チーム10人前後の日韓混成チームに分かれ、4泊5日のキャンプ活動の中で交流を深めようというものです。今年のテーマは「2018年平昌冬季五輪&2020年東京夏季五輪で日韓両国が相互協力できる新たな五輪ビジネス案」の企画・発表です。昨年は日本の福島で開催されましたが、今年は韓国の平昌で開催し、オリンピック開催地を訪れたり、韓国経済の現場体験を行います。

以下に参加要項の一部を掲載しますので、興味関心のある人は、グローバル教育部まで参加要項を取りに来て下さい。期日が迫っています。

日程 2017年7月24日(月)～7月28日

開催場所 韓国江原道平昌郡

募集人数 本校から2名応募(日本、韓国の高校生各40名)

参加費 10,000円

申込み締切 5月22日(月)必着

※校内締切は5月15日(月)とします。テーマ作文があるので、早めに取り組みましょう。

※昨年参加した岡田君の感想文が「グローバル通信36号」に掲載されています。

★朝鮮半島の今後の情勢によっては、プログラムの変更、中止、また学校として参加を辞退することもありますのでご了承ください。



生徒諸君も草原のゲルに宿泊します

Make School 第3弾

昨年の6月、今年の3月に続き、プログラミング教室の「Make School」を開催します。

本校主催の Make School は単にプログラミングを学ぶというだけではなく、テクノロジー社会を生きていく中高生にのしかかってくる様々な課題を共に考えていこう、という特色があります。しかも使用言語は、原則英語になります。前2回とも多くの生徒諸君が参加しました。今回もまた多くの参加者を期待しています。

日時 5月24日(水) 中間試験最終日 午後1時30分より(試験の都合で1時開始の可能性もあります。)

場所 コンピュータ教室

対象 全学年

条件 英検準2級程度以上の英語力を有すること

内容 Swift 言語ワークショップ(1時間半)

講演会及び座談会(1時間)

参加申込み 参加希望理由、英語能力(検定等)をA4の紙に書いて、グローバル教育部に5月18日(木)までに提出。

〈講師紹介〉Make School カントリーマネージャー 野村美紀(のむらみき)
東京大学卒業。東京大学在学中に、数々のIT系スタートアップで経験を積む。その後UCバークレーへ留学したことが大きなきっかけとなり、外資系コンサルティングファームの内定を辞退しテクノロジーで世界を広げる決意をする。2017年より Make School に参加し、自ら高校や Make School のクラスで講師も務める。

〈Make School について〉

Make School は、新しい形のIT教育を目指し、コンピュータサイエンス及び実践的なプログラミング教育を提供するサンフランシスコのスタートアップ企業です。中高大学生を対象に、様々なプロジェクトを通じてプログラミングスキルを習得できるカリキュラムを世界中で展開しています。2012年の設立以降、これまでに40カ国で2,000人以上の学生が Make School のカリキュラムを受講しました。卒業生はMIT、Harvard、Stanfordをはじめとした米国屈指の大学へ進学したり、Google、Facebook、Dropbox、Apple、Teslaといったシリコンバレーを代表する企業に就職しています。また外部機関からの評価も高く、サマープログラムの生徒がホワイトハウスに招待を受けたり、MIT、UC Berkeley、Carnegie Mellon University において Make School がカリキュラムとして導入されています。日本国内では、2016年より3日間～3週間の特別プログラムを英語で開催し、これまでに100人以上の生徒が参加しています。日本を含む全てのプログラムで、生徒はレジュメ・インタビューによる選考を受ける必要があり、選抜された学生のみが参加します。

Make School が期待する人物像は、グローバルな視点で「テクノロジーでどう世界は良く、面白くできるのか？」を考え、プロダクト開発を通じて想いを実現しようとイニシアティブをとれる人です。プログラミングはプロダクト開発におけるスキルの一つでしかありません。日本においてもこういった人物、そしてコミュニティの育成を目指す Make School は、サンフランシスコより講師を招聘し、特別プログラムを英語で開催することで、プログラミングスキル、英語、そしてプロダクト開発における考え方を習得する機会を提供します。多様性の中でこれからの未来を考え、ものづくりを楽しみながら世界を変えられる人々を一人でも多く生みだそうとしています。

